

第 83 回総会・研究大会の開催にあたって

私立大学図書館協会会長

西南学院大学 図書館長 古田 雅憲

私立大学図書館協会第 83 回総会・研究大会の開催を迎えました。感染症がなかなか収束しない困難な状況のなか、開催に向けてご尽力くださった皆様に、また国内外の各地からご参加くださった皆様に、会長校を代表いたしまして心より御礼を申し上げます。

開催にあたりまして、文部科学省研究振興局参事官（情報担当）付 学術基盤整備室長 藤澤 亘様、国立情報学研究所 学術基盤推進部次長 竹谷喜美江様よりご祝辞を頂戴してございます。心より御礼を申し上げますとともに、向後また引き続きましてご指導ご鞭撻たまりますようお願いを申し上げます。

さてご案内の通り、今年度もまた総会・記念講演・研究大会ともウェブによる配信という形式で開催することになりました。当初は会場校・追手門学院大学図書館の皆様方のアイデアとご尽力をもって、ウェブ配信と対面開催とを併用する「ハイブリッド」形式による開催を予定していましたが、ウイルス感染の急拡大をまえにして、やむなくウェブ配信のみでの開催を選択させていただいたような次第です。当番校としてご苦心いただいた追手門学院大学の真銅正宏学長をはじめ、追手門学院大学図書館の湯浅俊彦館長ならびに職員の皆様、またご関係の皆様のご尽力に心より御礼を申し上げます。

今回の研究大会では「学生主体の教育への転換と大学図書館DX」をテーマとして掲げていただきました。

私ども私立大学図書館が直面している課題は多岐にわたってございますが、なかでもこの「DX化」に関する取り組みは、ことに昨今の感染症蔓延を承けては、なおいっそう喫緊の検討を要する重要事なのだろうと存じます。

ただ巷間よく耳にする「DX化」という言葉は、それじたい何やら「ひとり歩き」している感がどうにも否めぬ気がいたします——「大学図書館のDX化」とは、実際、何をどうすることなのか、それを通じて教育・研究のありようはどう変わるのか、それを利用する学生や教職員、またそこで働く職員やそれを設置する大学法人にどのようなメリットがあるのか、またそれを行うにあたって法的な環境や関連企業との商習慣がどのように関係し、また地域社会との連携はどのように変わっていくのか——いろいろなご指摘やご助言を拝聴しながら現実的な場面を思い起こすにつけても、私はなお明確なビジョンを描くことができません。

まずは「大学図書館のDX化」という言葉の具体的な意味内容を改めて確認しあい、その実現に向けての現実的な道筋と、そこに生じるであろう課題とその解決方法等について、大学図書館に関わる私たち自身がしっかりと共有しあうことが、今、何にもまして必要であると思われなりません。

すでに言われているように「デジタル化」と「DX化」とは大いに異なる概念であり——前者が「物理世界のワークフローがそのままオンラインに移行」することだとすれば、後者は「ICTやデジタル特性を活かし、物理世界に存在しないサービスやワークフローがオンラインで実現」することに違いありません。となれば「大学図書館のDX化」が進めば、これまでの「物理世界に存在しな」かったような、実に歓迎すべき教育・研究・地域貢献の新しいありようがそこに具現するはずですが、ただそのとき、確固として「物理世界に存在し」ている大学図書館が単にその補完的な役割をなすにとどまってはならないのでしょう——まして「紙の書籍の

みを想定した施設」として軽視されるようになってはなりません。DX化が進めば進むほどに、確固として「いま、ここにある」大学図書館それじたいの存在価値と、またそれが担う教育・研究・地域貢献の意味とが改めて問い直されなければならないのだろうと存じます。

本日は、これからの大学図書館のありようについて明確なビジョンを共有しあう一助として、ご専門の皆様方の貴重なお話を拝聴し、ご視聴中の皆様方とも言葉と思いを交わしながら考えを深めあいたいと願っています。またウェブ配信を通じて後日ご視聴くださる皆様方にとっても実り多い研究大会となりますよう。どうぞよろしく願いいたします。

[附記]

本文中に引用した「デジタル化」「DX化」の定義等については、船守美穂氏がお示くださった下記のご高論に依ったことを明記します。

*船守美穂氏 (2020) 「デジタル化とDXの違い」

ウェブサイト：国立情報学研究所 オープンサイエンス基盤情報センター

<https://rcos.nii.ac.jp/miho/2020/12/20201223/> (2022.06.29 07:32 閲覧)